

## 論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名 孟 鷹

論 文 題 目

有標的指示詞の日中英対照研究  
(A contrastive study of marked demonstratives in Japanese, Chinese, and English)

論文審査担当者

主 査	名古屋大学	准教授	大島 義和
委員	名古屋大学	教授	大名 力
委員	名古屋大学	教授	木下 徹
委員	名古屋大学	准教授	加藤 高志

# 論文審査の結果の要旨

## 1 本論文の概要と構成

指示詞 (demonstratives) は通言語的に見られる範疇であり、その用法については個別言語学的見地・一般言語学的見地の双方から、数多くの研究が行われてきた。先行研究においては、指示詞の主要な用法として(i) 外部指示用法 (exophoric use), (ii) 照応用法 (anaphoric use), および (iii) 認識用法 (recognitional use) の3つが存在することが広く認められている。外部指示用法の指示詞は発話現場に存在する事物を指示対象とし、多くの場合ジェスチャーを伴って用いられる。照応用法の指示詞は、先行談話で言及された、または後続談話で言及される事物を指す。認識用法の指示詞は、談話参加者の共通知識に所属する事物を談話に導入するために用いられる。

先行研究において、指示詞には、一般的な用法に加えて例外的な用法があることが指摘されてきた。しかし、例外的用法の体系的な分析・分類や、一般的な用法と例外的用法の関係性に関して、多く研究課題が残されている。本博士論文では、日本語・中国語 (北京官話)・英語の3言語に見られる指示詞の例外的 (有標的) な用法に取り組み、コーパスデータおよび作例からなるデータを踏まえた新規性のある考察を行っている。

本論文は7章から構成される。第1章では、研究の目的が提示され、背景として、指示詞の中核的用法の記述と、多くの有標的指示詞の特徴である「非制限性」「情意的」という2つの概念の導入が行われる。第2章では日中英3言語における無標的指示詞に関する先行研究が概観される。

第3-5章では、それぞれ、日本語・中国語・英語における名詞修飾型有標的指示詞の用法の検討が行われる。具体的には、外部指示・照応・認識の3分類と、[+非制限的, -情意的], [-非制限的, +情意的], [+非制限的, +情意的] という特徴の組み合わせによって理論上存在しうる9種の有標的用法のうち、どれがどのような形でそれぞれの言語に存在するかという問題が検証されている。第3章では日本語の「この」「その」「あの」が取り上げられ、(i) [+非制限的, -情意的] の指示詞が外部指示用法、照応用法、認識用法のいずれにも見られること、(ii) 近称の「この」に限って [-非制限的, +情意的] および [+非制限的, +情意的] の用法を持つことが論証されている。第4章では中国語の近称指示詞「这 (zhè)」および遠称指示詞「那 (nà)」が取り上げられ、(i) 日本語と同様に [+非制限的, -情意的] の指示詞が外部指示用法、照応用法、認識用法のいずれにも見られることと、(ii) [-非制限的, +情意的] に相当する2つの用法が存在することが示されている。第5章では英語の“this”および“that”が取り上げられ、(i) 英語においては [+非制限的] の指示詞は一般に [+情意的] の特徴を持つが、(ii) 例外として“this”には [+非制限的, -情意的] に相当する、「談話参加者間の、指示対照に関する知識の不均衡を示す」用法が見られることが論じられている。

第6章では、上記の分類に収まりにくい、さらに周縁的な指示詞の諸用法が検討されている。第7章では、総括として3言語における有標的な指示詞の共通点と相違点が整理され、その背後にある要因の考察が行われている。また、3言語の比較を超えたより広い範囲の言語を対象とした類型論的研究に向けた提言が行われている。

# 論文審査の結果の要旨

## 2 本論文の評価

本論文は、学位論文として以下の点が評価される。

(1) 先行研究で断片的な議論・考察しかなされてこなかった指示詞の有標的用法に対して、体系的な分類を行う視点を導入した。

(2) 既存の日本語・中国語・英語研究において指摘されてきた種々の有標的な指示詞の用法を整理し、共通点と個々の特徴を明らかにした。

(3) 既存の研究において看過されてきたいくつかの有標的な指示詞の用法について、形式面・意味面の双方から記述・考察を行った。

一方で、将来に向けて次のような課題も指摘された。

(1) 展開される議論において中核的な役割を果たす「情意性」という概念に関して、作業仮説的な定義しか与えられておらず、理解を深める余地が残されている。

(2) 指示詞の用法の中には、「書き言葉的な場面」に特徴的なものが見られることが指摘されているが、これがより具体的にどのような使用域 (レジスター) を指すのか、必ずしも明瞭ではない。

(3) 指示詞の個々の用法に関して、「一般的である」「(会話では) あまり見られない」といった記述がいくつかの箇所で行われているが、これは個々の話者の印象に基づいたものであり、客観的なエビデンスを提示することが望ましい。

しかし、これらの指摘は今後研究をいっそう発展させるための課題であり、本論文は博士論文として十分に評価できるものである。

## 3 結論

以上の評価により、審査委員会は本論文が博士 (学術) の学位に値するものであると判断し、論文審査の結果を「可」と判定した。